

生き方・伝記



あたまにつまった石ころが

キャロル・オーティス・ハースト／文

ジェームズ・スティーブンソン／絵

千葉茂樹／訳

光村教育図書 2002年 1400円

小さい頃から石ころが大好きだったお父さん。人からは「頭に石ころがつまっている」と言われながらも、暇を見つけては石を集めて歩き回りました。その石への一途な情熱が人生を支え、ついに博物館の鉱物学部長に採用されます。



雪の写真家 ベントレー

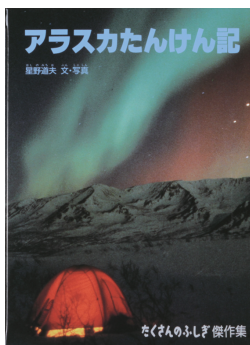
ジャクリーン・ブリッグズ・マーティン／作

メアリー・アゼリアン／絵

千葉茂樹／訳

BL出版 1999年 1400円

「わたしの写真によって、かつて一度も目にしたことない自然の美に触れ、心をふるわせる人々もいるに違いない。」ベントレーは、雪の美しさに魅了され、雪の結晶の写真を撮り続けました。ベントレーの生涯をつづった木版画の絵本です。



アラスカたんけん記

(たくさんのふしぎ傑作集)

星野道夫／文・写真

福音館書店 1990年 1300円

19歳の時、一枚の写真をきっかけにアラスカに魅せられた星野道夫。後に写真家となりアラスカに移り住み、厳しい自然とそこで生きる動物たちの姿を撮り続けます。クマの息遣いや氷の割れる音、ツンドラを渡る風やカリブーの足音が聞こえてきそうな写真絵本です。



ダーウィンのミミズの研究 (たぐさんのふしぎ傑作集)

新妻昭夫／文

杉田比呂美／絵

福音館書店 2000年 1300円

進化論で有名なダーウィンは、40年もかけて観察、実験を繰り返したミミズの研究を『ミミズの作用による肥沃土の形成とミミズの習性の観察』という本にまとめました。この本に魅せられた著者は、遂には、ダーウィンの研究の地ロンドンのダウンハウスの庭を掘り起こし、実験の足跡を探ろうと試みます。



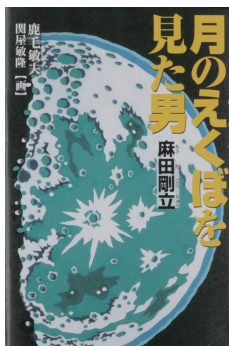
ぼくは貝の夢をみる (ゲッチョ先生の博物館 貝殻編)

盛口満／著

アリス館 2002年 1300円

※現在品切れ

浜辺であう貝たちは決してものは言わないけれど、貝を拾いはじめて約30年、貝の話が少し聞き取れるようになったと自負するゲッチョ先生の自伝です。「生物は地球上にいっぱいいるから、見ていても一生あきないぞ。」というお父さんの言葉に励まされているいろいろな生き物に夢中になっても、ゲッチョ先生にとってはやっぱり貝は特別な存在なのです。



月のえくぼ(クレーター)を見た男 麻田剛立

鹿毛敏夫／著

関屋敏隆／画家

くもん出版 2008年 1400円

日本最古の月面観測地図をつくったり、独自の観測器を使って日食や月食を数多く観測し、予測をした江戸時代の天文学者麻田剛立（大分県杵築市出身）。日本の近代天文学の礎となった彼の幼年期からの生涯を描くノンフィクションです。月面の数あるクレーターの中に、「アサダ」と名付けられたクレーターがあります。

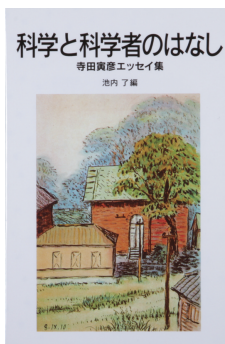


雪は天からの手紙 中谷宇吉郎エッセイ集 (岩波少年文庫)

池内了／編

岩波書店 2002年 720円

「雪は天からの手紙」で知られる実験物理学者 中谷宇吉郎は、科学者の目で社会をとらえ、多くのエッセイや社会評論を残しました。師の寺田寅彦や湯川秀樹など巡り合った科学者との思い出、身の回りにひそむ科学や非科学についてなど、若者に贈る21編を収めました。



科学と科学者のななし 寺田寅彦エッセイ集 (岩波少年文庫)

池内了／編

岩波書店 2000年 680円

著名な物理学者として、明治から昭和にかけて活躍した寺田寅彦は、夏目漱石門下でもあり、多くの優れた随筆を残しました。日常生活での体験を科学の法則や原理で、観察し考えることの面白さを、どの随筆からも読み取ることができます。「茶碗の湯」「鳶と油揚げ」など38編を収録しています。



わたしもファラデー たのしい科学の発見物語 板倉聖宣／著

仮説社 2003年 1800円

18世紀から19世紀にかけて生きたファラデー。彼は小学校しか出ていませんが、現代ならノーベル賞をもらえるくらいの大発見や発明をいくつもしました。ファラデーの生い立ちと、功績の数々を紹介しています。



センス・オブ・ワンダー

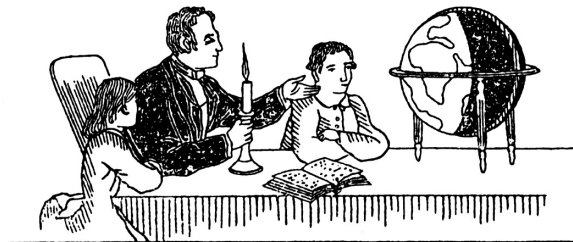
レイチェル・カーソン／著

上遠恵子／訳

森本二太郎／写真

新潮社 1996年 1400円

すべての子どもが生まれながらに持っている「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感性」。その感性をいつまでも失わないでほしいと願う『沈黙の春』の著者レイチェル・カーソン最後の珠玉エッセイです。



『訓蒙窮理図解』 第八章「昼夜の事」より



『訓蒙窮理図解』 第一章「湿気の事」より